

練成問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ではみなさんは、そういうふうに川だと言われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところをさしながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。

たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがあるのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立ってみるとうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいま

15

10

5

した。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっかになってしまいました。

先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、目をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名ざしました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、もじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで、

「では、よし。」と言いながら、自分で星図をさしました。

「このぼんやりと白い銀河を大きくない望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまっかになつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの目のなかには涙がいつぱいになりました。そうだが、僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのおとうさんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどころでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐおとうさんの書斎から大きな本をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒なページいっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。

それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返

45

40

35

30

25

20

事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

〈宮沢賢治「銀河鉄道の夜」より〉

50

① 線①「それ」が指していることを、「〜こと。」という形で書いて答えなさい。

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

こと。

② 線②「まっかになっちゃってしまいました」とありますが、ジョバンニがまっかになっただけでなく、なぜですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 勢いよく立ちあがったとたんに、答えを忘れてしまったことがとてもはざかしかったから。
- イ ザネリがわざわざふりかえってまで自分をわらったことに、はらが立ったから。
- ウ 先生の問いに答えられなかったうえに、級友にまでわらわれたことがはざかしかったから。
- エ 本を読まないためどんなこともよくわからない自分に、ふがいなさを感じたから。

③ 線③「もじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした」とありますが、カムパネルラがそのような態度をとった理由をジョバンニが想像している一文を本文中からさがし、その最初の十字を書きぬいて答えなさい。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

④ 線④「ジョバンニの目のなかには涙がいっぱいになりました」とありますが、このときのジョバンニの気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 以前はカムパネルラといっしょに雑誌を読む余裕があった自分たちを、なつかしく思い出す気持ち。
 - イ 勉強もできないほど仕事がいそがしい自分と、それに同情してくれるカムパネルラとをかわいそうに思う気持ち。
 - ウ わかっていた問題なのに、先生に何度聞かれてもきはきと答えられなかった自分をくやしう思う気持ち。
 - エ おとうさんが博士で書齋にたくさん本をもつカムパネルラが先生の問いに答えられないのはあわれだと思ふ気持ち。
- ⑤ 本文中で、カムパネルラはどんな少年としてえがかれていますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア あまり物を言わない無口な少年。
 - イ 友だちのミスをわらってしまふ少年。
 - ウ はざかしがりやで泣き虫の少年。
 - エ 友だち思いのやさしい少年。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《鉄冠子てつかんしに「仙人せんになりたいのなら何があっても口をきいてはいけない」と言われた杜子春とくしゅんは、気がつくとき獄ごくの閻魔えんま大王の前にいました。閻魔大王は、畜生道ちくじうだうに落ちている杜子春の父母を連れてくるよう、鬼おにに言いつけました。》

鬼はたちまち風に乗って、地獄じごくの空へまいあがりました。と思うと、また星が流れるように、二ひきのけものをかりたてながら、さっと森羅殿しんらてんのまえへおりてきました。そのけものを見た杜子春は、おどろいたのおどろかないではありません。なぜかといえそれは二ひきとも、形は見すばらしいやせ馬でしたが、顔は夢にもわすれない、死んだ父母のとおりでしたから。

「こら、そのほうはなんのために、峨眉山がびざんの上にすわっていたか、まっすぐにはくじょうしななければ、こんどはそのほうの父母にいたい思いをさせてやるぞ。」

杜子春はこうおどされても返答をせずにいました。「この不孝者ふこうしやうめが。そのほうは父母が苦しんでも、そのほうさえつごうがよければいいと思っっているのだな。」

閻魔大王は森羅殿もくずれるほど、すさまじい声でわめきました。「打て。鬼ども。その二ひきのちくしょうを、肉も骨ほねも打ちくだいてしまえ。」

鬼どもはいっせいに「はっ。」と答えながら、鉄てつのむちをとって立ちあがると、四方八方から二ひきの馬を、みれんみしやくなく打ちのめしました。むちはりゅうりゅうと風を切つて、ところきらず雨のように、馬の皮肉を打ちやぶるのです。馬は、——ちくしょうになった父母は、苦しそうに身をもだえて、目には血の涙あまをうかべたまま、見てもいられないほど、いなくなりました。

20

15

10

5

「どうだ。まだそのほうはくじょうしないか。」

閻魔大王は鬼どもに、しばらくむちの手をやめさせて、もう一度杜子春の答えをうながしました。もうそのときには二ひきの馬も、肉はさけ骨はくだけで、息もたえだえに階かゐのまえへ、たおれふしていたのです。

杜子春はひっしになつて、鉄冠子のことばを思い出しながら、かたく目をつぶっていました。するとそのとき彼の耳みみには、ほとんど声とはいえないほど、かすかな声がつたわってきました。

「心配はおしてない。わたしたちはどうなつても、おまえさえしあわせになれるのなら、それよりけつこうなことはないのだからね。大王がなんとおっしゃつても、いたくなくないことはだまっておいで。」

それはたしかになつかしい、母親の声にちがいありません。杜子春は思わず、目をあきました。そうして馬の一ひきが、力なく地上にたおれたまま、かなしそうに彼の顔へじつと目をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみのなかにも、むすこの心を思いやつて、鬼どものむちに打たれたことを、うらむ気色さえも見せないのです。大金持ちになればおせじをいい、びんぼう人になれば口もきかない世間の人たちにくらべると、なんといいありがたいところざしてしよう。なんといいけなげな決心けつきんでしょう。杜子春は老人らうじんのいましめもわすれて、まるぶようまるぶようにそのそばへ走りよると、両手に半死の馬の首をかかえて、はらはらと涙を落としながら、「おっかささん。」とひと声をさけびました。

(注)

森羅殿Ⅱ地獄にあるというりっぱな建物。

峨眉山Ⅱ中国の四川省にある山。

みれんみしやくⅡ思いが残ったりゆるしたりすること。

《芥川龍之介あゐがわらうちうのすけ「杜子春」より》

45

40

35

30

25

階Ⅱ階だん。
まろぶⅡ転がる。

- (1) — 線①「二ひきのけもの」とありますが、それはどんな生き物でしたか。三十字以内（句読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |

- (2) — 線②「鬼どもはいっせいに『はっ。』と答えながら、く打ちのめしました」とありますが、そのとき、杜子春は、どんな様子でしたか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 鉄冠子のことばを思い出しながら、むちで打たれる二ひきの馬を見ないようにしていた。
- イ ひっしになって、馬をむちで打つのをやめるように閻魔王にたのんでいた。
- ウ 耳に伝わってくるかすかな声を聞くこととして、かたく目をつぶってそれに集中していた。
- エ 目には血の涙をうかべて、息もたえだえに階のまえへたおれふしていた。

- (3) — 線③「老人のいましめ」とは何ですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 母親の「だまっておいで」という声。
- イ 閻魔王の「むちで打て」という命令。
- ウ 鉄冠子の「口をききな」ということば。
- エ 母親のありがたいところざし。

- (4) — 線④「はらはらと涙を落としながら」とありますが、杜子春は何を思っ涙を落としたのですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 金持ちとびんぼう人との態度を変える世間の人の冷たさ。
- イ 力なくたおれたまま悲しそうにむすこを見る母親の苦しさ。
- ウ つらいめにあわされてもむすこを思う母親のやさしさ。
- エ むちで打たれている両親を助けようとしない自分の身勝手さ。

単元 23 の新出漢字

〈92ページ〉

- 乳 ニユウ／ちち／ち
承 ショウ／うけたまわ（る）
困 コン／こま（る）

〈94ページ〉

- 孝 コウ